

霞ヶ浦周辺の水神信仰  
——玉造町と霞ヶ浦町の事例を中心に——

## 【発表概要】

本研究は霞ヶ浦周辺における水神信仰の現状を考察するものである。主に行方市玉造町とかすみがうら市霞ヶ浦町の湖岸に位置する集落の事例を中心に取り扱い扱う。今回の発表は夏休み中の現地調査の報告を中心に行った。発表の流れは、Ⅰ研究目的 Ⅱ研究方法 Ⅲ調査の報告 Ⅳ考察 Ⅵ今後の課題となっている。

## Ⅰ 研究目的

水神信仰は日本全国に分布しているが、地域によって、その性格や役割が異なると想定できる。今までの水神信仰に関する研究では、水神信仰をそれぞれの機能や役割により類型化するものが多く見られる。しかし信仰伝承は、時代の流れによって新しい要素を受け入れ古い要素を捨て去り、常に変容している緩やかな過程である。ここから、水神信仰を簡単に類型化して論じることにはできないと考える。従って本研究では、霞ヶ浦周辺地域の歴史や環境の背景と、水神信仰の構造、と展開を共に明らかにすることで、現代の集落における生業や環境の変化と地域信仰の変容の関連について考察する。

## Ⅱ 研究方法

水神信仰の由来や歴史を知るために、玉造町と霞ヶ浦町の民俗調査報告書の記述から水神塔の分布や成立についてのデータベースを作成する。水神塔をめぐる水神信仰の実態を明らかにするために、調べたデータベースに基づいて現地調査を行う。玉造町と霞ヶ浦町の地図を用い、データベースと調査で得た情報を整理して水神塔の分布図を作る。分布図に従って水神塔がある集落を訪ね、水神様を祭っている人々に聞き取り調査を行う。調査した結果と古文書、行政資料、古記録及び金石文などの一次資料や文献資料と合わせて水神信仰の変容と環境、生業の関わりを分析する。

## Ⅲ 調査の報告

①水神塔の分布と成立について、現地調査によると、玉造町と霞ヶ浦町の水神塔は殆ど湖岸に分布しているが、内陸にも個別の例が見られる。湖岸に分布している水神塔の周辺の景観に注目すれば、水神塔は多くの場合水産加工屋、問屋の近くにあるという特徴が見られる。

水神塔に刻んだ銘文を整理すると、年代が考証できない水神塔を除いて、明治時代に建てられたものが圧倒的に多いことが分かった。ここからなぜ明治時代かという問題が浮かび上がった。

②聞き取り調査によると、湖岸の水神塔はおよそ現在漁業に携わっている人により祭られており、豊漁と水上安全が求められている。一方、内陸の水神を祀っている人々は漁業関係者ではなく、祈願の内容は漁と関係がないため、湖岸と内陸の水神信仰には本質的な差異があると考えられる。

③霞ヶ浦周辺の水神信仰を担う主な組織は水神講である。現地調査により、霞ヶ浦町のいくつかの集落の水神講が行った様々な行事の控帳を整理し、水神講の機能を明らかにした。水神講の主な行事は水神祭である。次は、水死者の供養である。その他に、水神講は水神宮の建設や修理、船盗難事件の捜査、軍人に対する出征餞別、戦死供養などの機能も持っている。

④集落によって水神様の祭方が異なる。その差異から、集落ごとの水神信仰の厚さや特徴が見られると考えられる。水神様への信仰は主に水神祭に現れている。調査によると、水神祭は昭和30年（1955年）まで非常ににぎやかであったという。それ以後、賑やかな祭は漁師の減少によって、次第に省略されてきた。調査した事例によっては同業者の集団で行っていた水神祭が個人的なものとなり、さらに行わなくなる傾向が見られる一方、集落全体の行事になり、続けられる傾向も考えられる。また、水神信仰はかつて盛んであった舟運業との関係が強いことが分かる。

## Ⅴ 考察

## 1. 水神信仰と生業の関わり

明治以前から霞ヶ浦を多く航行していた船は物資運搬専用の高瀬舟であった。明治以前にも漁師がいたが、漁の技術はまだ発展していなかったため、大規模にならなかった。明治後期霞ヶ浦周辺鉄道ができる前に、水運業がかなり利用されていた。現地調査によると、現在でも霞ヶ浦湖岸の河岸は人々の記憶に残っている。明治時代に入ってから、帆かけ船が発明され、帆引きの漁法が創始されてから本格的な漁師が多くなった。霞ヶ浦の漁業も明治時代から盛んになった。漁業の発展に伴い、霞ヶ浦で取ったわかさぎ、しらうお、えび等を佃煮や煮干しにする加工業が霞ヶ浦周辺の集落から生まれ、繁栄した。加工業を専業としている人も水神講に入り、中には漁業

者から転化した事例も存在した。以上から見ると、明治時代は人と水が密接に関わっていた時代である。水運業や漁業、水産業などの生業が栄えたことによって、人々は水神様に水上安全、生業の繁栄を求め、水の恵みを感謝する心を強く持ったと考えられる。水神塔が明治時代に多く建てられたことは、この時期水に関わる生業の繁栄から水神信仰が厚くなった証拠の一つであると思われる。

## 2. 生業の変容による信仰の変容

水神信仰は生業の変容により、必要がなくなる又は必要とされる事柄が変わるなどの理由によって変化している。水運業と関わる水神が水運業がなくなることによって、個人の氏神になった事例がこれに当たる。また、漁業に関係の強い水神が漁業者のなくなることにより、水難事故を防ぐ集落全員の水神になる事例も見られた。恐らく水神信仰が発生する段階では差異はそこまでなかったが、伝承される段階で、生業の変容の不均衡によって差異が生じてきたと考えられる。

## VI 今後の課題

現地調査によって、もっと多くの事例を収集し、文献資料の証拠も加え、生業や環境の変化と水神信仰の変容の関わりについての考察を深めようと思う。

### 【質疑応答】

まず、指定討論者入山美保氏から、①日本全国の水神信仰の分布、②霞ヶ浦周辺の水不足の問題、③水神信仰の変容に対する考察の方法について質問をいただいた。これらの質問に対して、①日本全国の水神信仰の分布は先行研究で見られない、②水不足の問題もあったが、それは内陸の水神信仰がある理由と考えられる、③水神信仰が変容の中で集落の神になる傾向に注目したいと答えた。

そして、指定討論者村上晶氏から、①集落における水神信仰の位置づけ、②霞ヶ浦周辺の水の氾濫の問題、③水神塔が建てられた年代のみから水神信仰と生業の関わりを推測する疑問について指摘していただいた。これに対して、②水の氾濫の点について、時間の問題で、今回の発表では触れられなかった。①集落における水神信仰の位置づけと③水神信仰と生業の関わりへの他の証拠は今後の課題になると答えた。

また、指導教員の小口先生から水神信仰の分布図の作り方、集落における水神信仰の位置づけを知るための調査方法、水神塔の分布の特徴を見出すための調査方法について教えていただいた。

今回の発表は現地調査に基づいた一部の資料をまとめたものであるため、データ不足の問題、水神信仰と生業の因果関係がまだよく整理されていなかったという問題が感じられた。指定討論者と先生方からたくさんの建設的な意見やコメントは、私の研究に非常に役立つと感じている。また、今回の発表を経由し、研究の方向性がさらに明らかになったと思う。今後もこれらの意見を活用して研究していこうと思っている。

また、IFERI から支援をいただいたため、7・8月にかけての今回の現地調査は順調に進んだ。

今回の発表で意見をいただいた先生たちと IFERI の方々、及び現地調査を支援していただいた IFERI の方々にこの場を借りて心から感謝したい。